

199800109A

平成10年度 厚生科学研究費補助金
(厚生科学特別研究事業)

EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究

総括研究報告書

平成11年3月

目次

| | |
|---|----|
| 総括－EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究 | 1 |
| EBMにおけるリサーチライブラリアンの役割と養成 －ワークショップ・プログラムの作成とその評価－ | 4 |
| 平成10年度EBMリサーチライブラリアン・ワークショップの評価 －アンケート集計結果－ | 7 |
| EBMリサーチライブラリアン・ワークショップ アンケート | 24 |
| ワークショップテキスト | 29 |
| 第1章 デザインコアにおける目標 | 31 |
| 第2章 情報コアにおける目標 | 32 |
| 第3章 アクションコアにおける目標 | 33 |
| Electronic search の歴史とデータベースの種類 | 34 |
| ハンドサーチマニュアル | 43 |
| 付録A：ヘルスケアのRCTをコクラン共同計画の国際登録に登録するための基準 | 55 |
| 付録B：演習1の回答と解説 | 56 |
| 付録C：コクラン共同計画／EBM基本用語集 | 57 |

論文

- 坂巻弘之、津谷喜一郎、山崎茂明、廣瀬美智代、宇山久美子、中嶋宏. EBMにおけるリサーチライブラリアンの役割と養成: ワorkshop・プログラムの作成とその評価. 医学図書館 1999; 46(2):201-208.
- 岡田英孝. EBMリサーチライブラリアンワークショップに参加して. 医学図書館 1999; 46(3):269-71..
- 田部井香織. Evidence-based Medicineを支える情報サービスのあり方と図書館員の役割: 「EBMリサーチライブラリアンワークショップ参加報告」. 薬学図書館 1999; 44(3):275-81.
- 宇山久美子. 日本の3大データベースの特徴と検索時の問題点-特にEBMの観点から-. ほすびたるらいぶらりあん 1999; 24(3):203-13.
- 廣瀬美智代. コクランライブラリとハンドサーチ. ほすびたるらいぶらりあん 1999; 24(3):214-22.
- 山崎茂明. 日本におけるランダム化比較試験文献の生産と流通. 臨床評価 1999; 27(1):145-53
- 山崎茂明. Evidence-based Medicineを支援するための新しい情報源とサービス. 情報管理 1999; 42(4):293-302

EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究

(総 括)

(主任研究者)

国際医療福祉大学 国際医療福祉総合研究所
所 長 中 嶋 宏

わが国において EBM が広く臨床現場で実践されるためには、システマティックレビューを行なえる実務者(リサーチライブラリアンなど)の育成が急務である。そこで本研究では、リサーチライブラリアン養成に関連して、研究デザインのあり方から、データベース、抄録などの情報の組織化についてのさまざまな論点を抽出し、リサーチライブラリアンの役割を新たに検討しながら、リサーチライブラリアン養成のためのワークショップ・プログラムを作成することを主たる目的として実施した。

ここでのリサーチライブラリアンは、第1に、RCTを対象にエレクトロニックサーチを適切に実行できるサーチ専門家であり、第2に、研究デザインの知識を持った索引専門家であり、第3に、ハンドサーチを行える人である。

ワークショップ・プログラム作成にあたっては、それぞれの領域について実務経験と知識を有する研究協力者からなる研究班を組織し、わが国における現状調査、諸外国で使用されているデータベースや EBM 関連のツールの評価を行いながらワークショップ・プログラムの作成とテキスト執筆が行われた。

EBM の実践という意味では、情報を「つくる」、「つたえる」、「つかう」という3コアを理解することが重要と考え、デザインコア、情報コア、アクションコアの各コアについて現状分析をもとにリサーチライブラリアンとしての知識習得を目的とした内容を盛り込んだ。

各コアの目標は以下の通りである。

デザインコア：EBMに必要な情報環境と、EBMの基礎となるランダム化比較試験を中心に研究デザインとそれを見極め伝達する方法について理解する。

情報コア：EBMを情報源の組織化と流通という視点からとらえ、ここでのリサーチライブラリアンの役割を理解する。

アクションコア：日本の臨床試験の論文からRCTとCCTを探す方法を実際のアクションを通して身に付ける。

本プログラムは、研究デザインの基礎、情報の流通、わが国の主要なデータベースについて学んだ上で、Electronic SearchとHand Searchをケースメソッドの形で学習できるとの特徴がある。このプログラムに基づき、3月23日～25日の3日間ワークショップを開催し、参加者によるテキストならびに研修プログラムとしてのワークショップ評価が行われた。

本研究によって作成されたテキストは、今後、リサーチライブラリアン育成のための出版物として供される予定であるが、リサーチライブラリアンだけでなく、医療現場の情報ユーザーとリサーチライブラリアンとのコミュニケーション・ツールとしても広く読まれることが期待される。

ワークショップについても単に研修の場の提供に止まらず、検索やハンドサーチ手順の標準化や経験交流の場として継続的に実施されることが必要と考えられる。さらに、今回のワークショップの対象者は医学図書館員中心に行ったが、EBMの環境作りとして、臨床試験論文の研究者・執筆者、出版社、データベース作成・提供機関をも対象とすべきと考えられ、今回のテキストならびにワークショップ・プログラムが利用されることが期待される。

研究組織

主任研究者

国際医療福祉大学 国際医療福祉総合研究所

中嶋宏

分担研究者

東京医科歯科大学 難治疾患研究所 情報医学研究部門

津谷喜一郎

研究協力者

東京医科歯科大学大学院 医学系研究科博士課程 医師

作手村診療所 所長

自治医科大学 医師

”

JANCOOC

”

”

”

コントローラー委員会

愛知淑徳大学 文学部 図書館情報学科

教授

”

助教授

順天堂大学 図書館 司書

東京慈恵会医科大学 医学情報センター 司書

国際医学情報センター 課長

科学技術振興事業団 主任情報員

”

係長

”

副主任情報員

医学中央雑誌刊行会

課長

”

課長代理

”

主任

日本医薬情報センター

部長

”

部長

”

課長

毎日新聞社 JAMA 日本語版 編集長

日経 BP 社 日経メディカル 副編集長

国際医療福祉大学 国際医療福祉総合研究所 教授

”

研究員

”

研究員

金子 善博

名郷 直樹

橋本 淳

浅井 泰博

廣瀬 美智代

平田 智子

栗原 千絵子

八重 ゆかり

淵上 尚子

野添 篤毅

山崎 茂明

青木 仕

田部井 香織

宇山 久美子

服部 博美

田村 奈巳

崎原 久義

宮野 昌明

三沢 一成

藤川 英則

太田 福子

河野 光男

松山 さやみ

岩石 隆光

北澤 京子

豊田 建

岩崎 理香

坂巻 弘之

ワークショップスケジュール

3月23日(火) [デザインコア]

開会挨拶

中嶋 宏

EBMの基本と現場からの情報ニーズ

名郷 直樹

—The Cochrane Library/EBM-R のデモを含む—

インターネットによるMEDLINEの使い方

田部井 香織

—PubMed, MEDLINE Plus—

医学研究デザインの基礎

津谷 喜一郎

CASPによる研究デザイン学習

北澤 京子

3月24日(水) [情報コア]

EBMを支えるための情報源の組織と流通に果たす

山崎 茂明

リサーチライブラリアンの役割

Electronic Searchの歴史とデータベースの種類

宇山 久美子

JMEDCINEの特徴

科学技術振興事業団

医中誌の特徴

医学中央雑誌刊行会

JAPICDOCの特徴

日本医薬情報センター

3大データベースの使い方、留意点

宇山 久美子

3月25日(木) [アクションコア]

Electronic Search 概説

宇山 久美子

—検索例の解説を含む—

Electronic Searchの限界とハンドサーチの必要性

廣瀬 美智代

—Cochrane Hand Search Manual を例に—

総括

津谷 喜一郎

EBMにおけるリサーチライブラリアンの役割と養成 —ワークショッププログラムの作成とその評価—

坂巻弘之 1)、津谷喜一郎 2)、山崎茂明 3)、廣瀬美智代 4)、宇山久美子 5)、中嶋宏 1)

- 1) 国際医療福祉大学 国際医療福祉総合研究所
- 2) 東京医科歯科大学 難治疾患研究所 情報医学研究部門
- 3) 愛知淑徳大学 文学部 図書館情報学科
- 4) JANCO C
- 5) 国際医学情報センター 情報調査課

I. はじめに

わが国においてエビデンスに基づく医療(Evidence-Based Medicine: EBM)が広く臨床現場で実践されるためには、システマティックレビューを自ら行ない、またそれをサポートする実務者(リサーチライブラリアンなど)の養成が急務である。今回、平成10年度厚生省厚生科学特別研究事業(主任研究者:中嶋宏、分担研究者:津谷喜一郎)において、リサーチライブラリアン養成を目的としたワークショップ・プログラム及びテキストの作成が調査研究として実施された。

本研究の成果であるプログラムに基づき、1999年3月23～25日にワークショップが開催され、東京都内の医科系大学、病院図書館の司書を中心とした参加者及び講師を合わせ39名が参加し(報道関係者、オブザーバを除く)、その有用性についての評価・検討が行われた。

さらに、作成されたテキストは、わが国におけるEBMの普及・環境作りのために広く臨床試験研究者、臨床試験論文の執筆者、医学雑誌編集者、出版社、データベース作成・提供機関などにも読まれることが期待されるため、現在出版準備中である。

本稿では、本研究により作成されたワークショップ・プログラムの概要を、実施されたワークショップに対する評価結果とともに紹介する(注)。

II. 研究の背景と目的

医療現場においては、患者マネジメントの効果について科学的視点からみて信頼できる情報(エビデンス)に基づいた臨床判断や診療方針の決定が必要である。EBMでは、①臨床上の疑問の明確化をもとに、②文献の効率的検索、③科学的規範にそった文献の批判的吟味、④得られたエビデンスを患者に適應する、というステップがとられる^{1,2)}。近年、自らの診療にこの方法をとる医師が急速に増えてきた。

このエビデンスは、個別の臨床判断に用いられるだけでなく、診療ガイドライン作成のような政策レベルでも用いられる。英国においては、国民健康サービス(National Health Service: NHS)における診療ガイドラインの策定の根拠として重要視されている。

米国でも行政や学会など、さまざまなレベルでエビデンスに基づいたガイドラインが作成されており、そこにはその基礎となったエビデンスのリストが示されている。わが国では、EBMの基本的考えに基づき、厚生省の研究として数々のプロジェクトが始まった。平成9年度厚生科学研究「難治疾患・稀少疾患に対する医薬品の適応外使用のエビデンスに関する調査研究」³⁾のプロジェクトはその一例であり、具体的なエビデンスの収集・評価の作業が行われた。

エビデンスのユーザーは多様であり、患者や消費者もこのユーザーに含まれる。こうしたユーザーのニーズに対応するための、テーマ選定、情報収集、評価、メタ分析、レポートिंगの一連の流れはシステマティックレビューと称される。コクラン共同計画(The Cochrane Collaboration)では、国際的プロジェクトとしてシステマティックレビューを行い、The Cochrane Libraryに収録している⁴⁾。

ユーザーが、エビデンスレベルの高い情報をより効率的に収集・吟味し、利用する行動に結びつけるには、ユーザーだけの努力にのみ期待すべきではない。それをサポートするシステムが、開発されるべきである。そこでは、システマティックレビューで典型的に示される、ユーザーに役立つエビデンスの高い知識・情報の組織化が求められ、また、文献データベース・学術雑誌・抄録などの組織化が要請されている。

これらの情報流通に関わる専門家としてのリサーチライブラリアンの養成がわが国においても重要な課題となっていることは論を待たない。ここで、リサーチライブラリアンとは、臨床医に情報を提供するクリニカルライブラリアンから医学データベース作成者までの広いスペクトラムを指す。欧米では、ACP Journal Club誌やEvidence-Based Medicine誌などが情報を提供するだけでなく、EBMを支える情報流通についての日常的な議論が活発に行われている。例えば、構造化抄録(structured abstract)作成の流れなどは、その成果の一例と考えられる。

構造化抄録の採用により、情報提供側は、標準化されたレポート・抄録作成、検索語付与を標準化することが求められ、エビデンスの利用する側も、目的に合った検索を容易にでき、検索結果のエビデンスのレベルを評価できるようになる利点がある。

今回の研究では、リサーチライブラリアン養成に関連して、

研究デザインのあり方から、データベース、抄録などの情報の組織化についてのさまざまな論点を抽出し、リサーチライブラリアンの役割を新たに検討しながら、リサーチライブラリアン養成のためのワークショップ・プログラム及びテキストを作成することを目的として実施した。

なお、本ワークショップ・プログラムは、医療情報学、臨床疫学、臨床薬理学、医療経済学などの専門家、データベース作成者、ユーザーの豊富な経験と相互の意見交換に基づいて作成された。

III. ワークショップ・プログラムの概要

ワークショップ・プログラムは、デザインコア、情報コア、アクションコアの3つのコアについて現状分析をもとにリサーチライブラリアンとしての知識習得を目的とした内容を盛り込んだ。

各コアの目標と概要は以下の通りである。

1. デザインコア

日本では、EBMに関心を持つ人の増加や、各種出版物の刊行、ホームページの整備などの発展と、具体的なEBMの実践の増加が見られる一方、それを実践するための問題点も明らかになってきた。それは、一口にいうと日本でEBMを実践するための情報インフラ整備の遅れである。

すなわち、第1に、日本の臨床試験がEBMのための世界的なデータベースに収録されていないこと、第2に、日本の医学データベースはEBMを実践するためには不十分なことである。

これらの問題は、組織的な教育の場がないために、エビデンスを「つくる」臨床試験研究者及び臨床試験論文の執筆者、エビデンスを「つかい」日々の意思決定を迫られる医療従事者、この両者の間に入ってエビデンスを「つたえる」仕事に従事する者がEBMそのものと基本的要素である研究デザインについて、十分理解していないことが理由の一つと考えられる。

そこでデザインコアでは、EBMに必要な情報環境と、EBMの基礎となるランダム化比較試験(randomized controlled trial: RCT)を中心に研究デザインとそれを見極め、伝達する方法について理解することを目標としている。

ここでは、EBMの基本と医療現場での情報ニーズについて概説され、エビデンスレベルを評価するための基礎として研究デザインの概論、エビデンスレベルの高い情報を得るための代表的、しかも世界的にも権威のあるデータベースとしてThe Cochrane Libraryの紹介、研究デザインの批判的吟味の方法論について諸外国のデータベース、ソフトウェアの紹介と合わせて解説される。

EBMの現場での行動プロセスとして、問題の定式化、情報収集、批判的吟味、患者への適応という4つのステップが必要であること、海外データベースの近年の発達についてCD-ROMやINTERNETを利用しながらThe Cochrane LibraryやMEDLINEの使い方について学習する。

研究デザインの理解のために、エビデンスと臨床試験、バイアス、ランダム割付け、前向き・後ろ向き研究、エビデンスの

レベルのそれぞれについてリサーチライブラリアンも理解しておくことが必要であることを明らかにし、EBM実践のためには医療供給者だけでなく、消費者も情報について批判的吟味ができるような教育が必要と考えられ、そのためのツールとして英国で開発されたCASP(Critical Appraisal Skills Programme)が紹介される。

2. 情報コア

EBMを実践していく上で、日本のエビデンスを得るためには、日本のデータベースをサーチする必要がある。データベースごとにキーワード付与や抄録の特色などを理解し、制作側との連携により適切な検索技法と、データベースそのものの質向上に貢献しなければならない。日本語環境も重要であり、日本の医学データベースがEBMを支援できるよう対応していくために、協力関係を発展させることが重要である。

そこで情報コアでは、EBMを情報源の組織化と流通という視点からとらえ、そこでのリサーチライブラリアンの役割を理解することを目標とする。現在の情報源に関する論点や新たな情報の組織化、構造化抄録の採用の必要性と意義などについての説明と、わが国でエビデンスレベルの高い情報を入手するために、わが国の3大データベースであるJMEDICINE、医学中央雑誌、JAPICDOCのそれぞれについての特徴とそれらの使い方、留意点が述べられる。

また、情報のアブストラクト化と構造化抄録の必要性、日本の現状(RCT文献の生産、構造化抄録採用など)についての調査から問題点を明らかにしている。

日本でなされたRCT文献がThe Cochrane LibraryやMEDLINEなどの海外データベースには十分収録されておらず、また日本の医学文献データベースでも対応がなされていないという現実がある。また、わが国のデータベースは、さまざまな制約により、MEDLINEのようなpublication type、研究デザイン用語の収録が不十分である。

そこで制作側から各データベースの使用上の留意点が解説されるとともに、ユーザーサイドからみたデータベースの比較について解説される。

3. アクションコア

EBMでエビデンスとして用いられる論文の研究デザインとしては、メタアナリシス>RCT>比較臨床試験(controlled clinical trial: CCT)の順でエビデンスのレベルは高い。有効にRCTを検索するには、各データベースの特性を活かした手だてが必要である。MEDLINEではpublication typeを用いてRCT、CCTを検索することができる。また、コクラン共同計画は、ヘルスケアの介入の有効性のシステマティックレビューを行い、The Cochrane Libraryとして発行している。システマティックレビューでは、各リサーチクエスションに対応するRCTをすべて収集しようと努めるが、MEDLINEのみでは求める文献が約半数しか得られないことが知られている。これはRCTのイ

ンデックスが不十分なことの他に、そもそもデータベースに入っていないものは検索されないからである。特に非英語論文のMEDLINEへの掲載は十分ではない。このため、検索とハンドサーチが行われる。

アクションコアでは、前2つのコアの学習を前提に日本のデータベースからRCTとCCTを探する方法を実際のアクションを通して身に付けることが目的である。

実際に3大データベースを用いて、どのように検索を行えば効率的にエビデンスレベルの高い二次情報にアクセスできるかについて説明され、さらにデータベース検索における限界とハンドサーチの必要性を理解したうえで、ハンドサーチの手法をケースメソッドによりマスターする。

JMEDICINEを開いてsensitivityを高く、RCT論文を検索する場合、その検索式は約40行にもわたる。このように工夫次第では、わが国でも検索によりRCT、CCTを見つけ出すことは可能であるが、各データベースの機能・特徴を十分理解し、specificityを考えた上で検索式をたてる必要があり、このプロセスの標準化が重要である。

日本のデータベースの抄録には、JICST系の〔指示的〕(indicative)なもの、医学中央雑誌やJAPIC-DOCなどの〔報知的〕(informative)なものがあるが、これらの抄録や他のフィールドに研究デザインが記載されないこともあって、検索結果の閲覧のみではエビデンスレベルを確実に評価することは困難であり、ハンドサーチが必要である。そこでコクラン共同計画で用いられているハンドサーチ・マニュアルに基づき、ハンドサーチ・テキストが作成された。

本テキストをもとに実際の臨床論文がRCT、CCTあるいはそれ以外のいずれかの判別を、また臨床雑誌からRCTを抽出する作業をケースメソッドとして実施し、ハンドサーチの実際を学ぶコースが設定されている。

IV. ワークショップ・プログラムの評価

参加者のアンケートによりワークショップの評価が行われた。3日間を通して回収されたアンケートは35名分であった。

参加者のうち、データベース検索経験のあるもの29名(88%)、データベース作成経験を有するもの19名(58%)で、平均検索経験年数9.1年、平均作成経験年数2.0年であった。EBMに関する知識では、EBMという概念を知っていたものは、有効回答33名中28名(85%)、聞いたことがあるもの5名(15%)であり、知らなかったと答えたものはなく、EBMとの用語は普及していると考えられた。日常よく用いているデータベースとしては、CD-ROM版MEDLINEではOvid、internet版ではPubMedであった。国内データベースでは、医学中央雑誌、CD-ROM、JMEDICINE、JAPICDOCの順であった。

各セッションの評価については、講義、教材、時間、理解、有用性の5項目で評価することとした。有用性評価結果は、すべてのセッションにおいて概ね「役立つ」、「まあ役立つ」との評価であったが、データベースの特徴に関するセッションについては「役立つ」との評価が少なかった。これは今回の参加者

が検索経験を有しているものを中心であったため、講義が既知の内容であったことによると考えられた。全体を通しての評価では、時間配分で「悪い」との評価がかなりあったが、ほかは概ね良い評価であり、今後の業務に役に立つとの評価が100%で、研究デザインから検索・ハンドサーチについての体系的な研修を行うことがEBM普及に有用であると考えられた。

おわりに

今回の研究を通して、データベース作成側のさまざまな制約と情報ユーザー側のニーズとの違いが明らかとなったが、論点の整理ができた意味では、有益な意見交換の場であった。本研究により作成されたワークショップ・プログラムを通してEBMに関する議論が高まり、EBMが実践されることを期待する。

参考文献

- 1) Sackett, DL, Richardson, WS, Rosenberg, W, Haynes, RB(久繁哲徳 監訳).
根拠に基づく医療—EBMの実践と教育の方法—.
東京:薬業時報社; 1999
- 2) 名郷直樹. EBM実践ワークブック
—よりよい治療をめざして—東京:南江堂; 1999
- 3) 厚生科学研究オーファンドラッグ開発研究事業
(班長 津谷喜一郎). 難治疾患・希少疾患に対する
医薬品の適応外使用のエビデンスに関する調査
研究平成9年度研究報告書; 1998
- 4) 別府宏暉, 津谷喜一郎編. コクラン共同計画資料集.
東京:サイエンティスト社; 1997

(医学図書館 46巻2号(1999年)掲載予定)

平成 10 年度 EBM リサーチライブラリアン・ワークショップの評価 —アンケート集計結果—

はじめに

EBM リサーチライブラリアン・ワークショップは平成 10 年度厚生科学特別研究事業として実施された。ワークショップ開催に先立ち、講師らにより全体の構成、プログラムの策定がなされ、執筆されたテキストを用いて平成 11 年 3 月 23～25 日にワークショップが開催された。本報告書は、ワークショップ参加者のアンケートによる評価を集計したものである。

方法

ワークショップは 3 日間にわたり開催され、各日程の最後にその日のプログラムに該当する部分を配布し、回収を行った。配布したアンケート用紙は、本報告書の最後に添付した。

結果

ワークショップへの参加者は、講師(研究班員、研究協力者)、participants(医学図書館院)、observers(報道、出版関係者)であり、全体で 55 名(1 日のみの参加者も含む)、observers を除く参加者は 39 名で、1 日分以上のアンケートが記入され回収できたものは、35 名分であった。各日程ごとの参加者数が異なっているため、各設問毎の回答者数も異なっている。

参加者のうち、データベース検索経験のあるもの 29 名(88%)、データベース作成経験を有するもの 19 名(58%)で、平均検索経験年数 9.1 年、平均作成経験年数 2.0 年であった。EBM に関する知識では、EBM という概念を知っていたものは、有効回答 33 名中 28 名(85%)、聞いたことがあるもの 5 名(15%)であり、知らなかったと答えたものはなく、EBM との用語は普及していると考えられた。

日常よく用いているデータベースとしては、CD-ROM 版 MEDLINE では Ovid、internet 版では PubMed であった。国内データベースでは、医学中央雑誌、CD-ROM、JMEDICINE、JAPICDOC の順であった。

講義については、各セッションとも「悪い」との評価はほとんどなかったが、「よい」と評価するものが多かったのは、「EBM の基本と現場からの情報ニーズ」、「EBM を支える情報源の組織と流通」、「3 大データベースの使い方」、「Electronic Search 概説」、「Electronic Search の限界と Hand Search の必要性」であり、逆に「各データベースの特徴」については「よい」との評価が少なかった。これは教材についての評価についてもほぼ同様の結果であった。

時間配分については、「長い」との評価があったものは「EBM の基本と現場からの情報ニーズ」、「医学研究デザインの基礎」、および「各データベースの特徴」で、「短い」との評価が多かったものが「CASP による研究デザインの学習」、「3 大データベースの使いかた」、「Electronic Search の限界と Hand Search の必要性」であった。

理解については、「3 大データベースの特徴」で「理解しにくい」との評価がわずかにあったが、その他は

概ね「理解できた」「まあ理解できた」との評価であった。

有用性は、すべてのセッションにおいて概ね「役立つ」、「まあ役立つ」との評価であったが、「3 大データベースの特徴」に関するセッションについては「役立つ」との評価が少なかった。

全体を通しての評価のうち、ワークショップの開催形式で、「期間」、「時間」、「時期」が「悪い」との評価がやや多かった。

プログラムについては、時間配分で「悪い」との評価がかなりあったが、ほかは概ね良い評価であり、今後の業務に役に立つとの評価が 100%であった。

考察

わが国においてエビデンスに基づく医療(Evidence-Based Medicine : EBM)が広く臨床現場で実践されるためには、システムティックレビューを自ら行ない、またそれをサポートする実務者(リサーチライブラリアンなど)の養成が急務であるが、そのための体系的な教育プログラムの作成はこれまで不十分であった。

データベース検索については、これまでデータベース作成機関が開催するセミナーなどがあったが、EBM の実践という意味では、情報を「つくる」、「つたえる」、「つかう」という 3 コアを理解することが重要と考え、これらを網羅したワークショッププログラムの作成を行った。

そのため、本プログラムは、研究デザインの基礎、情報の流通、わが国の主要なデータベースについて学んだ上で、Electronic Search と Hand Search をケースメソッドの形で学習できるとの特徴がある。

今回のワークショップ・プログラムへの評価は、全体として概ね高い評価であったが、3 大データベースの特徴に関しては、やや評価が低かった。これは今回の参加者が検索経験を有しているものが中心であったため、講義が既知の内容であったことによると考えられた。

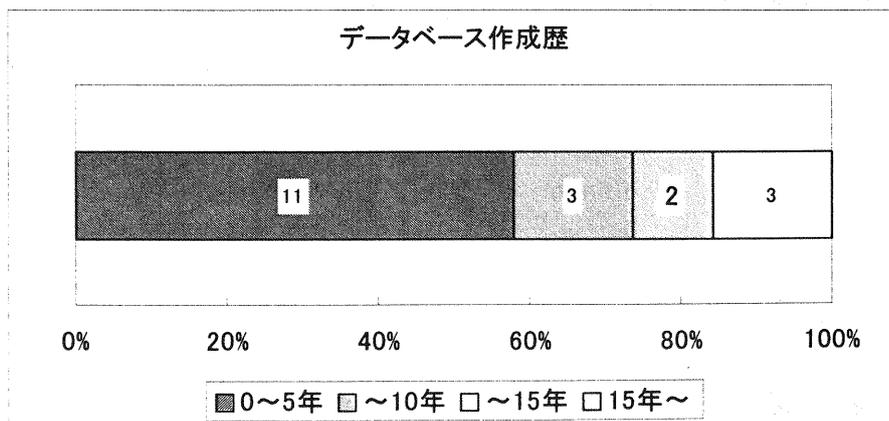
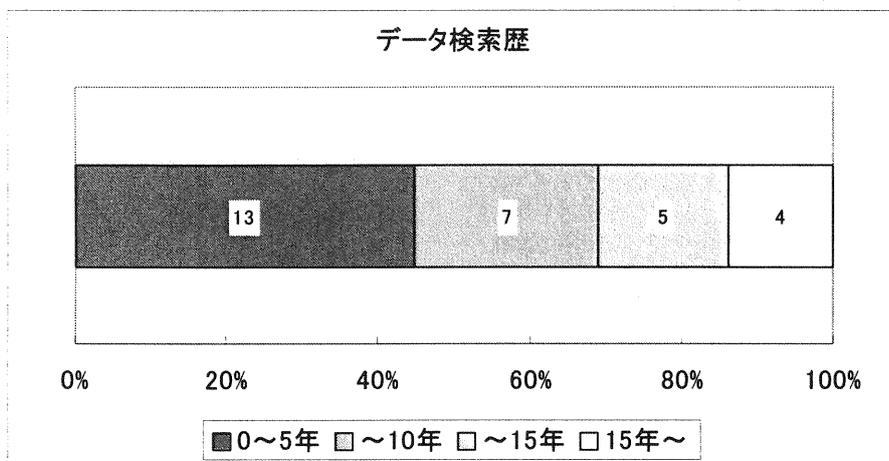
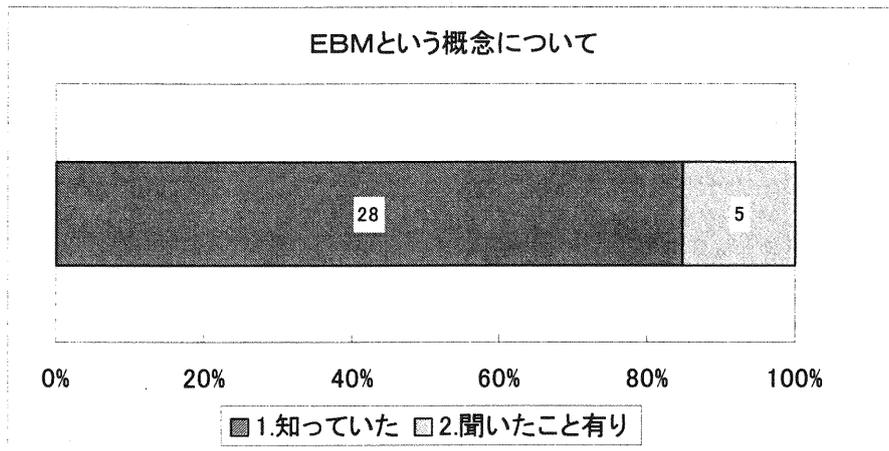
各セッションの自由記述から特徴的な意見をピックアップすると、医学研究デザインについて学ぶことの意義を評価する意見、CASP への高い関心、EBM を支えるための情報源の組織化と流通という視点でリサーチライブラリアンの役割を明確化したことへの評価が高かったと感じられた。

しかしながら、3 日間のワークショップではあったが、内容が多岐にわたったため、各セッションの時間が短い、時間配分が悪いとの指摘も多く、この点での改善の余地が多いと考えられた。

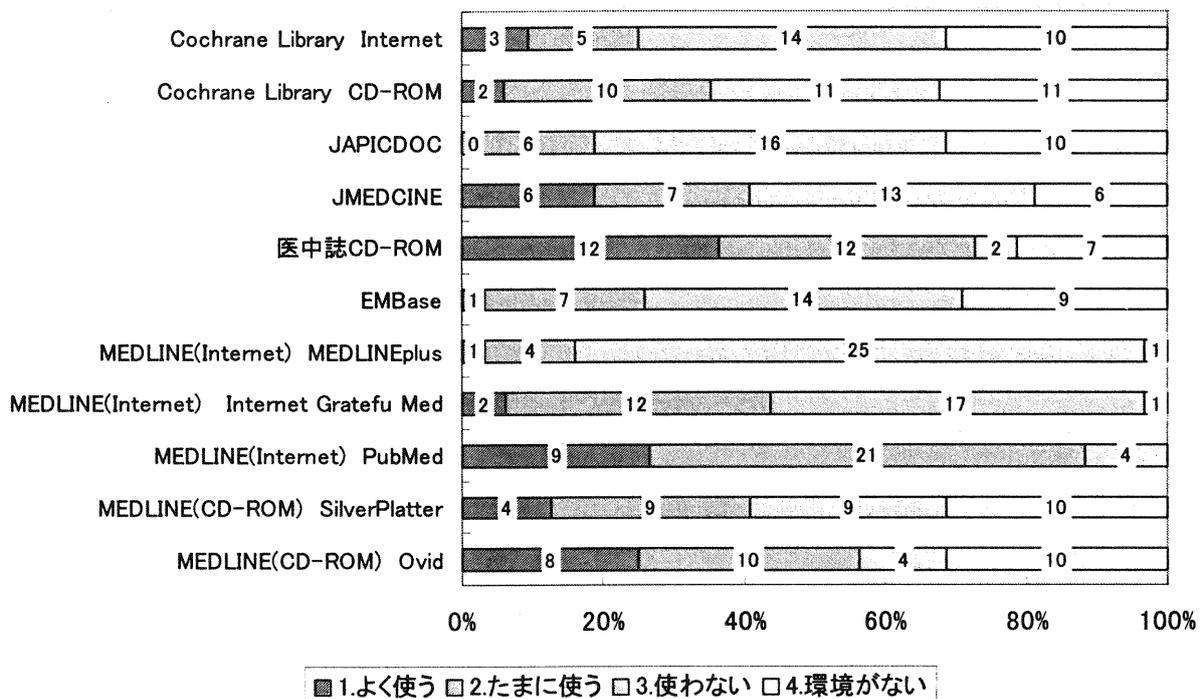
結語

EBM 実践のためのワークショップ・プログラムとして、研究デザインから検索・ハンドサーチについての体系的な研修を行うことが EBM 普及に有用であると考えられた。

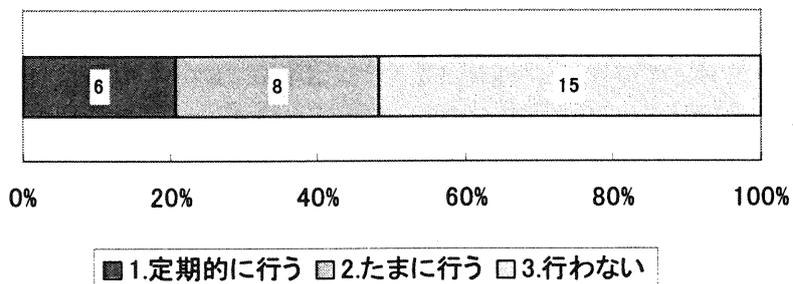
1 参加者の所属施設情報



利用状況について



スクリーニングの経験



1 参加者の所属施設情報

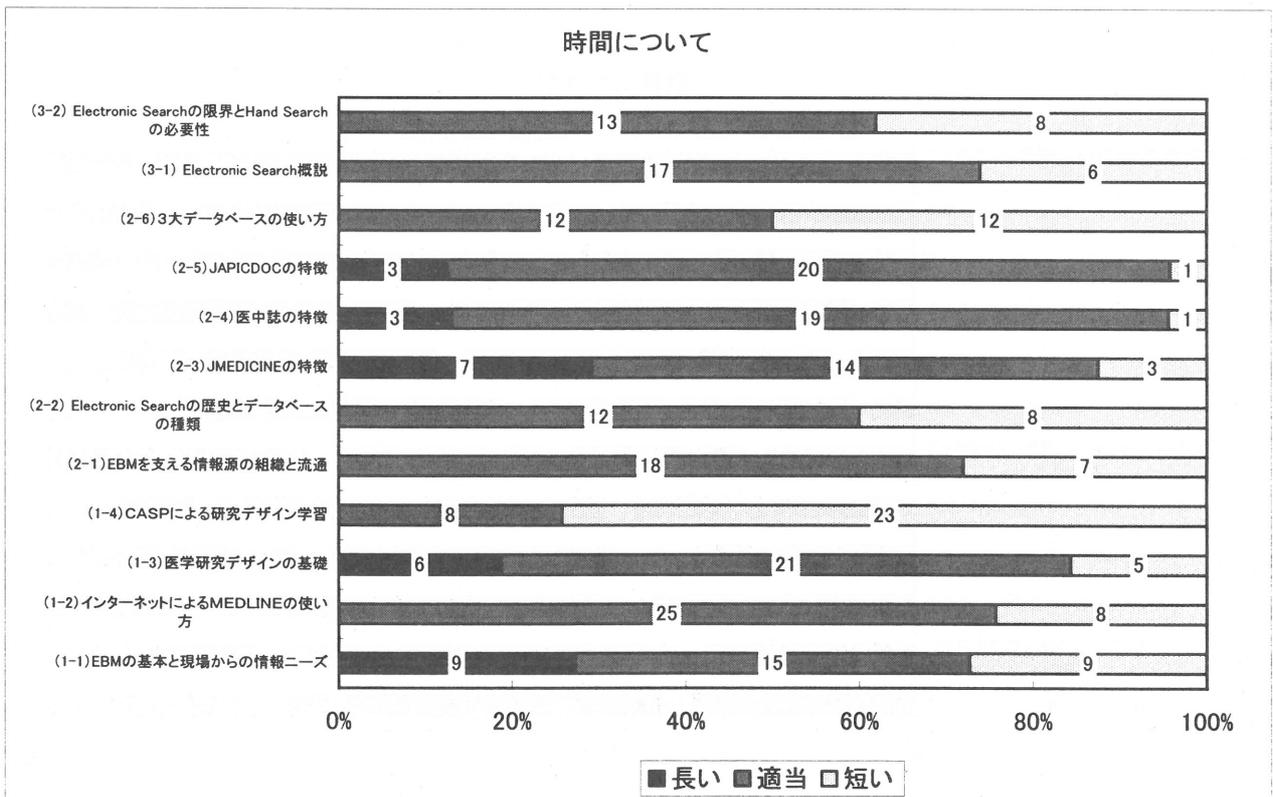
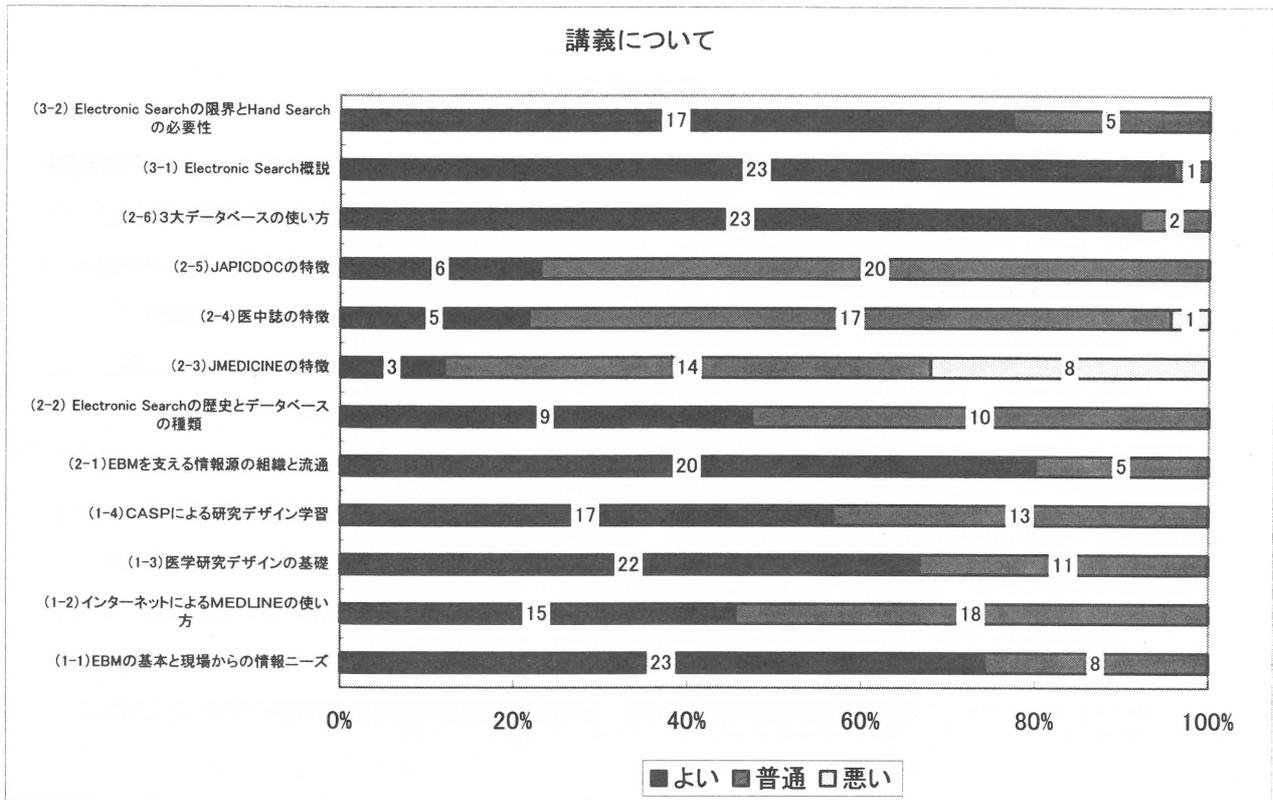
1. よく使うデータベース

| |
|---|
| ACPJCOD |
| BSC、JCRはよく利用する。 |
| JISTファイル、MEDLINE (JOIS版) |
| MEDLINE |
| Current Contents/Life Sciences、Current Contents/Clinical Medicine、SciSearch |
| 国立国会図書館雑誌検索 (CD)、日経テレコン |

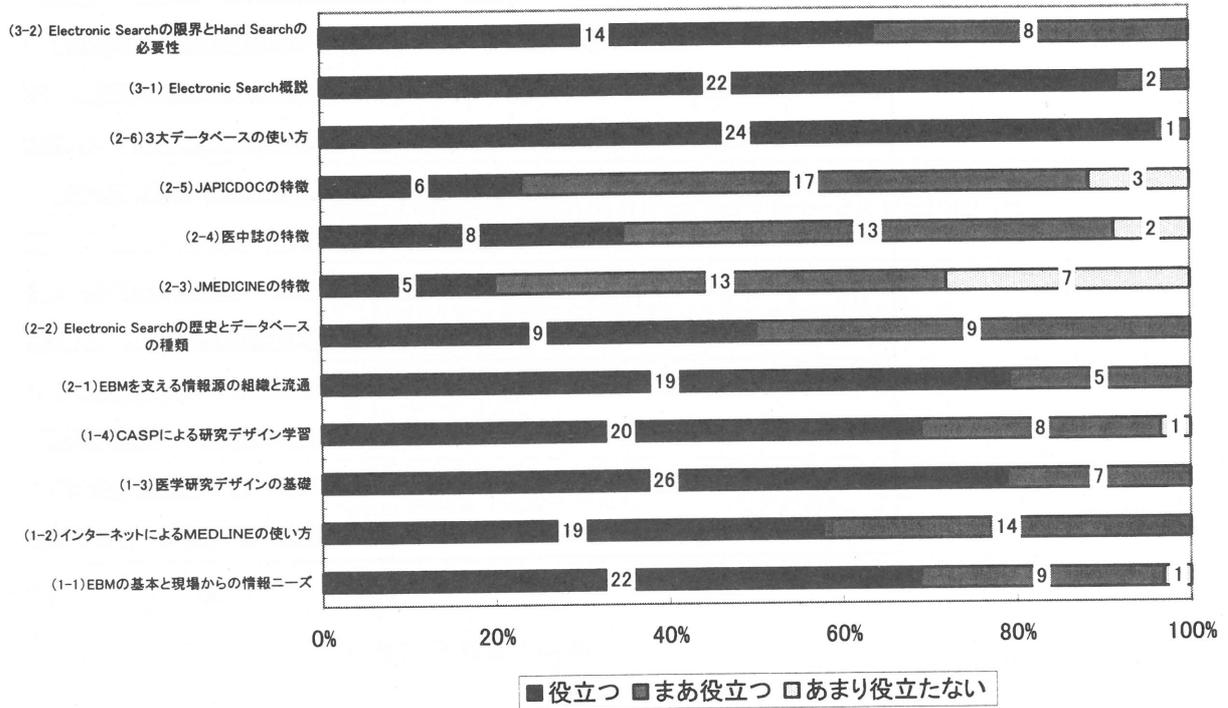
2. 利用者から要望の多いもの

| |
|--|
| 簡単で安価な国内医学DBの充実 |
| 東京慈恵医科大学情報センターでは商業誌の特集記事にMESHを付与して紹介するサービスが大変好評です。 |
| 医中誌のネットワーク環境下での使用。 |
| 医中誌をPubmedのように利用できないか (インターネット上で、検索方法など)。 |
| 医中誌の検索ソフトがもっと使いやすくないか。検索した結果からフルテキストを直接入手したい。 |
| Cochrane Libraryの購入希望が複数ある。 |
| 医局から検索したい。検索方法を教えて欲しい。代行検索して欲しい。 |
| 国内における看護文献のDB化 (コンピューターによる)。 |
| 医学中央雑誌のWeb版 |
| 今月からDIALOGWEBを導入し、500種類以上のデータベースを利用できるようになったが、臨床医からは以前つかっていたOVIDでMEDLINEやCurrent Contentsを検索するほうが良かったという声がある。また、ダウンロードした結果をEndNoteなどReference Management Softwareで利用できないと困る、との声がある。医中誌は87年から、JMEDLINEは81年からの検索が可能なのだが、もっと古いところから、網羅的に、簡単かつ正確に検索できる日本語文献のデータベースを望む声はよく聞かれる。 |
| 求めるものが何か良くわかっていない人が多いように思う。具体的にはすぐFulltextをみたいという要望が多い。 |
| 日本語医学文献データベースの充実について {内容 (データそのもの)、ソフト (検索するためのソフトウェア)}、日本語医学周辺分野 (e x, 医療経済、福祉等) のデータベースの実現について |
| 著者より検索をもとにした資料作成を頼まれ、一度アクセスして作成した。 |

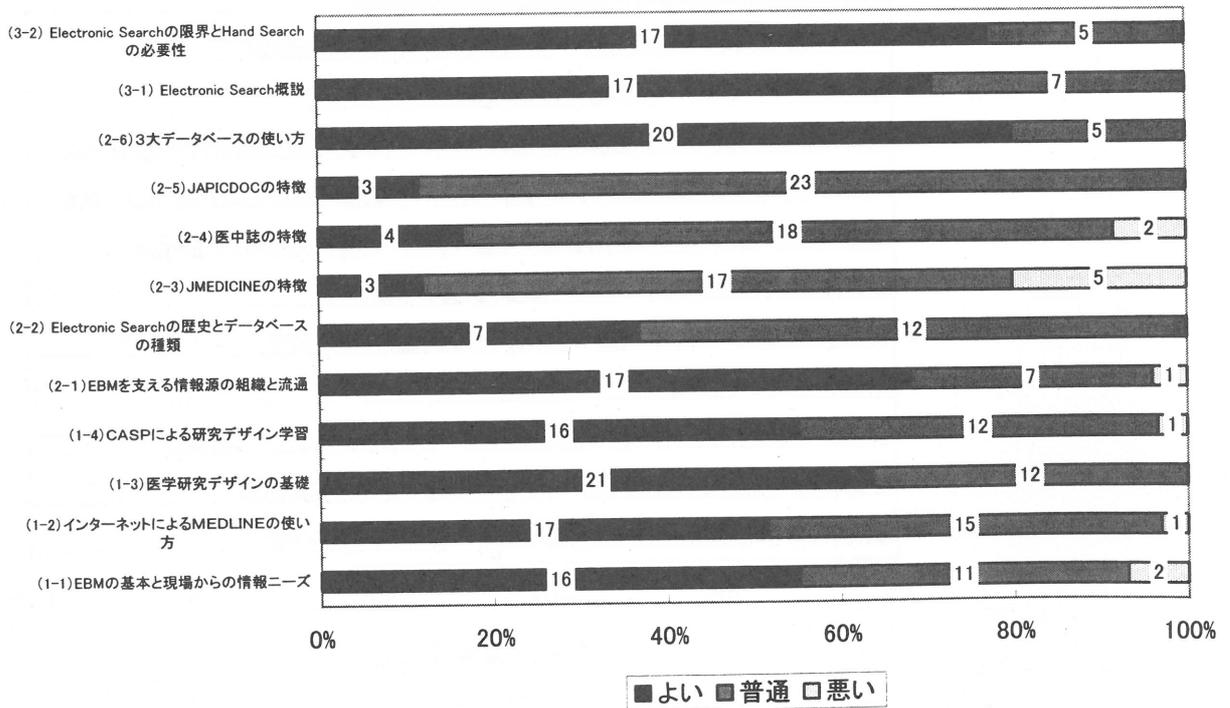
II 各セッションへの評価



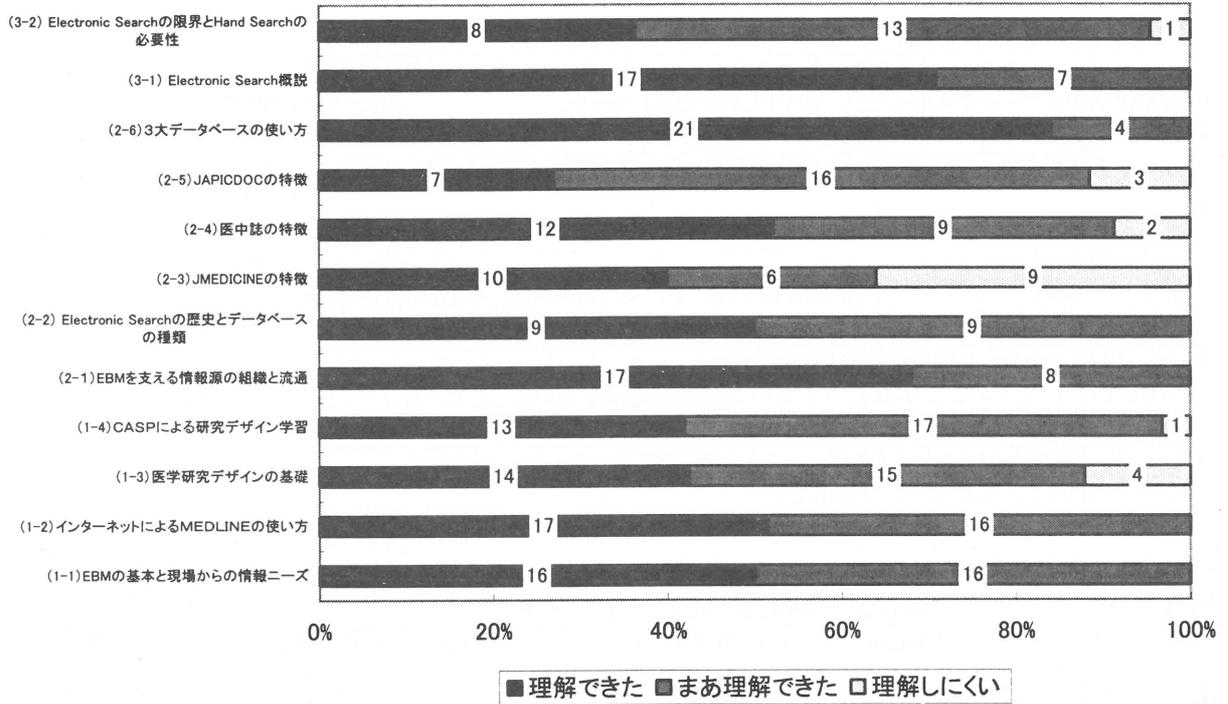
有用性について



教材について



理解について



II-1. 各セッションへの意見(1日目)

1. EBMの基本と現場からの情報ニーズ

| |
|--|
| ユサコ社のプレゼンテーションとのコーディネーションが悪い。角田氏のプレゼンテーションはフォーカスがずれていた。 |
| 自分の発表なのでバイアスの入った評価。 |
| 時間が守られていない。(申し訳ありませんでした。) |
| もう少しそれぞれの流れを関連付けたほうが良いと思います。EBMの基本という面ではなんとなく理解でき、EBMの重要性も分かったような気がします。 |
| 臨床の場からの経験で役立った。 |
| Cochrane Libraryそのものを知らない人にはLibraryがどういうものであるか分からなかったかもしれません。 |
| 講義の進め方がユニークで良かったが、もう少し時間が欲しかった。 |
| 医師からの話は貴重ではあるが、EBM自体の説明と情報のニーズの所は、分けるとすっきりすると思う。話はこれでも充分だけれど、別の視点で、ではEBMにおいて医療に携わる人は図書館に何を求めているのかという視点での話も良いかと考えられる。 |
| EBM Reviewsのことが分かりにくかったが、臨床の現場のことが分かって良かった。これとは別の時間帯を設けたほうが良かったのではないかと。 |
| EBMにおいて結局ライブラリアンに求められていることは何なのかが分からなかった。でも楽しかった。 |
| 医師の立場からの説明はとても良かった。 |
| 導入としてはとても分かりやすく面白い講義だった。 |
| 「EMBってけっきょくのところは何??」という疑問が消えました。 |
| 先生の「EMB実践ワークブック」を読んでいたので良くわかった。 |
| 検索のノウハウは自分でアクセスすればよいこと。時間的にもつたいないと思う。 |
| 研究のためではなく、患者のためであること。 |

2. インターネットによるMEDLINEの使い方(懇話会提供)

| |
|---|
| 普段あまりインターネットでMEDLINEを使わないが試してみたいと思う。 |
| 実際の業務では学内LAN上のMEDLINEで充分足りているのでなかなかPubmedを使う機会はないが、今後は機会を見て試してみたいと思う。 |
| 簡潔にまとめられていたと思う。 |
| 実際の検索画面を見せて欲しかった。 |
| 「MEDLINEの情報の正確さと内容の正しさ」との話が興味深かったです。 |
| 図書館員にとって実践的なテーマであり、もう少し時間をかけたほうが良かった。 |

3. 医学研究デザインの基礎

| |
|--|
| 時間的に短かったが分かりやすかったです。 |
| 館員はおそらく文系の人が多いですし、苦手な領域のはずです。しかし意外と勉強する機会もないのでとても良かったです。 |
| 全て理解したとはいいませんが、研究デザインの理解が大切なことは感じられました。 |
| 用語についての基本的知識を持った上でできれば、更に分かりやすかったですでしょうが…。 |
| 専門用語が多かったのもっと初心者向けに説明して欲しかった。 |
| ランダム化比較試験、良く分かりました。 |
| もう少し時間をとって詳しい講義が聞きたかった。 |
| 専門用語が分かりにくかった。 |
| ランダム化比較試験、バイアス、エビデンスの強度などの用語がどういうことを示すものなのか理解できたと思います。 |
| メタアナリシスが一番evidenceの強度が強いという点。通常論文の結論として、「これはメタアナリシスなので前向きな試験が必要」という場合が多いと思います。 |

4. CASPによる研究デザイン学習

| |
|---|
| もっと聞きたかった。 |
| もっと時間があつたらと残念でした。 |
| CASPというもののそのものを知らなかったのもっと楽しみでした。時間がなくて残念でしたが、ビデオのプレゼンテーションはインパクトがありますね。 |
| もっと色々お聞きしたかった。情報の受け方については反省すべき点があると思う。 |
| 教育という面から考えて、もっと充実させてもよい講義だった。 |
| とっても興味がありますが、何しろ駆け足だったので残念でした。練習問題(?)をやってみたかった。 |
| EBMは医師だけのものではないと、今までの視点を変えられてとても有効でした。 |
| もう少し聞きたかった。 |

| |
|--|
| 時間がなかったのが残念だった。 |
| 時間がなくて残念だった。じっくり説明を聞きたかった。 |
| 時間の制約もありますが、ちょっと駆け足でした。 |
| 具体的な例を提示され、分かりやすかった。 |
| 全体的に時間が足りない。十分な時間が欲しかった。スケジュールに無理があると思う。 |

II-2. 各セッションへの意見(2日目)

1. EBMを支えるための情報源の組織と流通

| |
|--|
| 論文数をもとに種々の解析されたところが分かり易い。 |
| MEDLINEのような新しい情報源についてどちらも否定することなくそれぞれの存在理由をはっきり示して下さったのはとても良かったと思います。 |
| テキスト、資料がしっかりしていて理解に役立った。 |
| 図書館員としてEBMにかかわる視点が定まった。 |
| 図書館員が関われそうな具体例を入れた話をもう少し聞きたい。 |
| 今後の図書館の役割、関わっていける部分についてのご意見をもう少し時間をかけて伺いたかった。 |
| OHPの内容についてもあらかじめ資料として頂けるとよかったと思う。お話を聞きながらメモを取っている間に次のOHPに移ってしまったところがあり、見逃してしまったところがあつて残念だった。 |
| 日常的に使用しているMEDLINEとEBMの関連をきちんと確認できた。 |

2. Electronic Searchの歴史とデータベースの種類

| |
|----------------------|
| この部分は導入だったのでこれで良かった。 |
|----------------------|

3. JMEDICINEの特徴

| |
|---|
| JICTシソーラス改定が主のテーマになってしまった。 |
| 問題をしばって発表してほしかった。内容やJSTの仕事など価値あるものであるが発表としては不満が残る。 |
| ふだん使っていないせいもあり、またMEDLINEのシソーラスやデータの構成に慣れていることもあってちょっと分かりにくかったです。検索例が長いとどこを見たら良いのか焦点があいまいせん。 |
| EBMのなかでどう位置づけられるのかどう変わっていくかではなくたんなるDBの説明なら不要。 |
| 検索方法の説明なのかデータベースの特徴なのか話のポイントがはっきりしない。データベース自体が使いにくいものであるから、時間をかけなければ理解できない。 |
| 良く使っている人にはあたり前のことを、使っていない人には分かりにくいことをものすごいスピードで説明された。何もかも見せずにもっと焦点を絞って欲しかった。 |
| 業務等で使用したことがなかったため分かりにくかった。 |
| このワークショップのテーマに対して何故この項目が必要なのか。ワークショップのポイントがずれたのではないか。 |
| 話のポイントがよく伝わらなかった。EBMとの関連についても不明確。 |
| 魅力的でない。JICSTとJAMASの違いが分かりにくかった。もっと工夫して欲しい。 |

4. 医中誌の特徴

| |
|--|
| 簡潔でありながらポイントをきちんと説明していた。EBMへの取り組みにも前向きであり、医学DBとして発表できる。 |
| 別紙3、「臨床試験関連の統制語の変遷」は大変良かったと思います。 |
| 医中誌に関する講義でindexingの側面からの話というのはなかったのですがその辺は評価できるが、indexingの話自体は図書館学等を学んでいると、目新しいことはなくなってしまうのだがその辺はどうなのでしょう。 |
| 収録の際の基準(=内規)についてもう少し詳しく知りたかった。また検索用の専用のアプリケーションのバージョンアップや改良等についてはどのように方針が決められているのか知りたかった。 |

5. JAPICDOCの特徴

| |
|---|
| JAPICのパンフなど、配布して欲しかった。 |
| コードやクラスなどのお話はちょっと具体的過ぎました。普段使っていないからなのですが…。 |
| 初めてのデータベースなので雰囲気をつかむのには良かった。 |
| 身近な話題ではなく、基礎的な点もよく分かっていないため。 |

| |
|--|
| 今日の講義に臨む前に自分でJAPICDOCを検索して結果をプリントアウトして持ってきたので、お話を聞きながら結果を見ても内容がよく理解できた。他の受講者の方も検索例を見ながらお話を聞いたらもっと分かりやすかったのではないかと思います。医薬品に関しては医中誌やMEDLINEより重要なデータベースではないかと思うので研究者にも使用をすすめてほしいと思う。 |
| 3つの説明とも分かりやすかったのですが「紹介」のみでなく「現状の不具合を改良する為にこうする考え」とか「より使いやすくする為には」等の今後の方針なども紹介して頂きたかったです。 |
| 使用する機会が少ないと思うので。 |

6. Electronic Search : 3大データベースの使い方

| |
|---|
| この時間を長く聞きたかった。 |
| ストレートで良かった。問題提起型の発表であり優れていた。 |
| 3つのDBの違いがよく感じられました。いかに使い分けられるかは明日分かると思いますが楽しみです。 |
| せっかくの講義なのでもっとゆっくり聞きたかった。 |
| JMED, 医中誌, JAPICDOCの限界という面では興味深い話であったが、すると前の3つの話はなんだったのかということにもなるまいか。 |
| 3つのデータベースの比較が分かり易かった。JICSTは普段から使いにくいと思っていたが今回の話でもなお一層その感を強くした。User friendlyなシステム…難しいのでしょうか。EBMを身近にし、実践していくためには使いやすいシステムはなくてはならないと思う。病院図書室にて仕事をしていると検索のしやすいものというのは最低条件と思う。 |
| とても分かりやすかった。DB製作者の話聞くよりこちらのほうが比較できてずっといい。 |
| 担当が変わったので検索から離れているが知っておかなければならない内容でした。 |
| (6)を中心に十分。もっと時間があれば良かった。 |
| 短い時間でデータベースの特徴について理解できてよかった。もっと詳細に時間をかけてもよいと思う。 |
| 具体例を示して開設して頂き、実践的で大変分かりやすかった。 |
| 実際に検索をおこなっている視点での比較+要望はとても納得できました。 |
| これまで考えていたことを代弁してくれていた。是非ともPublication Typeの付与とシーラスの統一をデータベース作成の方々に御願いたい。この2つをなくして日本の医学・科学・化学のデータベースの改善はありえない。是非実行を。 |
| 同じサーチャーの立場として寺山氏の話は非常によく理解できた。(1)パブリケーションタイプが重要であり、日本のDBは早急に改善の必要がある (MEDLINEではRCTはMESHとPTでは数倍の違いがある)。(2)著者抄録を取れないという日本の学術出版のシステムが問題。いくらレポートを良くしてもインデクサーは医学の専門ではなく、インデクシングのレベルを上げるには限界がある。そのためにも著者抄録を出版社・著者がDB製作者に使わせるような体制が必要。 |

II-3. 各セッションへの意見(3日目)

1. Electronic Search概説

| |
|---|
| 具体的な例が示され、分かりやすかった。検索式はすごい一語に尽きる。 |
| 資料があちこちに飛んで分かりにくいところがあった。 |
| ポイントは抑えられていて大変分かりやすかった。実際の検索なども行えて確認できるとより良いかと思います。 |
| OHPで提示されたものも複写物として配布してほしかった。 |
| 実際的で分かりやすかった。 |
| 言葉として存在するのに、フリータームになっていない不思議さなど納得がいきました。実感のある「洩れと感度のグラフなど、身近に思えました。 |
| 検索式など具体的に示されたため聞きやすかった。できればJMEDだけでなく医中誌にも言及して欲しかった。 |

2. Electronic Searchの限界とHand Search

| |
|---|
| 演習の時間を長くして欲しい。RCT、CCTの区別(違い)をじっくりと説明して欲しい。 |
| 演習によって概念だけでなく実際の作業の感じがつかめた。 |
| 時間がなく、理解に及ばないまま終わってしまった。 |
| 演習は難しかったです。 |
| 具体例で実際に体験できたのは面白かった。 |
| 演習があり具体的で良かった。コクランやBIOMEDなどの部分は分けてもう少しそれぞれで時間があると良かったのではないかな。 |
| 今までよく分からなかったことがクリアになった。 |
| 直接RCTの文献リストを求められることは、当館においてはあまりないのですが、区分のための「文献の読み取り方」、「ルール」みたいな点が興味深かったです。 |

III 全体への評価

